

## 学生ボランティア派遣事業の意義と役割

立花 有希

2010年に「外国人児童生徒教育支援のための学生ボランティア派遣事業」を開始して以来、400名を優に超える学生ボランティアが学習支援に携わってきた。学習支援には個別支援と集団支援とがあり、個別支援の派遣先は栃木県内の小中学校(2018年度には栃木県立学悠館高等学校通信制でも行った)、集団支援の場は主に小山市の外国人児童生徒適応指導教室「かけはし」と真岡市のスペイン語教室AMAUTAである。ボランティアの多くは、国際学部・研究科の学部生、研究生、院生であるが、教育学部・研究科の学生、院生の参加もある。個別支援については、来日間もない児童生徒の母語が話せる学生を探すことが多い。学年定員が100人に満たない国際学部からウルドゥー語やモンゴル語、ロシア語の母語話者である学生を派遣してきた実績は誇らしく、国際学部の国際性を改めて目に見える形で実感させてくれる。近年、学習支援に必要とされることが増えている中国語・日本語のバイリンガルも学部内に多くいる。そしてまた、かれらの多くが積極的に支援への参加を申し出てくれるのが心強い。自身にも中学時代に中国から日本へ来た経験があり、「きっと力になれると思う」と語る学生のまっすぐなまなざしが頼もしく、これ以上ふさわしい支援者があるだろうかと胸が熱くなったこともあった。日本人の派遣希望学生の場合には、留学経験を生かしたいと考えていたり、教員志望ではないものの学校教育に関心が高かったりすることが多いように思う。留学経験には、身につけた言語力だけでなく、日本語を話す人が周りに一人もいない状況で過ごした時間という経験も含まれる。むしろ、後者の方が学習支援には生きているかもしれない。

学生ボランティアは、その名の通り、ボランティア(自由意志から出た)活動である。大学のボランティア活動には、学生に対するボランティア教育(ボランティア活動の意義を理解させる働きかけ)の意味合いが含まれることもあるが、この事業に関しては、学生から教えられることの方が多様な気がする。たとえば、2016年度入試から導入された国際学部の外国人生徒入試で入学した学生が学生ボランティア事業に協力してくれていることは、外国人生徒入試の本質を再確認させてくれる。すなわち、かれらは国際学部に入れてもらったのではなく、入ってもらったのだということだ。栃木県の外国人児童生徒教育に宇都宮大学が貢献できているのは、こうした学生がいてくれることに他ならないからである。そして、そうした活動を授業で取り上げることで、学生の学びは一気に具体性

を帯びてくる。たとえば、国際学部の1年次必修科目である「多文化共生概論」を1コマ受け持っているが、そのときに外国ルーツで日本語能力が学業達成の壁になっている子どもの教育について考えさせ、合わせてこの学生ボランティア事業を紹介することになっている。その授業での学生のコメントには、こうした活動をしている先輩に憧れ、自分も頑張りたいというものがある。そこに国際学部のエースとでもいべきものが引き継がれていることを感じる。多言語能力、異文化理解、国際協力を実際的な形にするスキルと行動力。「社会問題は知れば知るほど暗い気分になってしまうが、自分たちにもできることがあると思うと前向きになれる」というコメントもあった。理想と現実、課題と行動とをつなぐ好例がこの事業なのだと教えられた。そして、この活動とその意味の探究は、教員であるわれわれの研究を支える信念にも多大な影響を与えている。つまり、現代の大学に求められる教育、研究、社会貢献のいずれに対しても、この学生ボランティアは大きく寄与しており、しかもそれらの間に有機的連関を生み出しているのである。

以上、大学側における本事業の意義について見てきたが、支援の現場ではどうだろうか。派遣先の小中学校からは、多くの感謝の言葉をいただいていた。なぜか。それはやはり、他の誰かが担うことのできない役割を学生たちが果たしてくれたからだろうと思う。子どもの母語が話せる、言語的・文化的な疎外感を感じている子どもの立場を共感的に理解できる、親でも教師でもない大人として子どもに接する、ロールモデルとして子どもにとっての具体的な目標になる、そうした存在が貴重かつ重要なことは明らかであろう。外国人児童生徒教育の課題は多い。それを学校が担いきれないから外部からボランティアが手助けするというのではない。学校内外の資源を最大限に活用して、外国人児童生徒にとって最適な学習環境を整えていく。そのために大学が果たせる役割は何かということなのである。

最後に、この事業は、細々とした諸連絡や煩雑な諸手続きを着実に進めてくれる事務スタッフなしには成り立たないことに触れておきたい。歴代のコーディネーター、事務補佐員の方々に心からの謝意を表し、この事業が発展的に継続することを切に願う。

## 外国につながる子どもの学修支援 「学びの教室」における学生ボランティアの存在

小山市教育委員会 教育総務課 早川 俊夫

外国につながる子どもの学習支援「学びの教室」(通称

「学びの教室」)は、本市において、平成27年度に事業を開始し、今年度で6年目になりました。その間、多くの小山市内の中学校に通う外国人生徒が、ここでの学習を生かし、進学や就労につなげています。「学びの教室」に登録している生徒の数は毎年約20人、実施回数は年間14回となっており、10月から翌年3月の土曜日の午前中に45分の授業を3コマ実施しています。

近年は、全国的に日本語指導が必要な生徒が増加しています。これらの生徒は、全国各地の学校に在籍し、多くの地域や学校でその対応が求められるようになっていきました。こうした生徒にとっては、日本の学校の教授用語としての日本語は、初めて耳にするものであり、学習はもちろんのこと、学校生活そのものも困難を伴うものになっています。これは、小山市も例外ではありません。

小山市では、平成27年度に各地区公民館の研修室等を利用して、土曜日の午後に、学習が遅れがちな中学生を対象に、学習習慣の確立と基礎学力を定着させるための学習支援を始めました。この事業開始時に、「外国人生徒への学習支援も」との声が高まり、「学びの教室」を実施することになりました。本市の中学校に通う外国人生徒に学習の場を設け、学習支援を継続的に行うことにより、将来への希望をもって高等学校進学等を選択できるようにすること、また、将来の就労につながるようにすることが目的となっています。

本事業において、宇都宮大学や白鷗大学等の学生ボランティアの存在は、たいへん大きなものです。何が分からないのかを説明することも難しい生徒に寄り添い、その言葉に耳を傾け、丁寧に支援してくれています。優しく、温かく、接してくれています。学生ボランティアの支援を受けている生徒の顔は、生き生きとし、やる気に満ちています。生徒の中には、また次回、同じ学生ボランティアに会えるのを楽しみにしている生徒もいます。本事業における学生ボランティアの存在は、生徒の進学や就労の支援になるだけでなく、生徒の学びに向かう気持ちを高めることや将来に希望を持って進路選択することに、役立っていることを感じます。今後も、学生ボランティアの協力を得ることで、一人でも多くの外国人生徒が、希望通りの進路選択ができることを願ってやみません。

## ペルー人生徒への学習支援3年間の歩み

大学院国際研究科博士前期課程2年 オルティス ゆみこ  
はじめに

私は、HANDS事業を通して外国にルーツのある子供たちの教育問題を知り、さらに身近で体験してきました。

HANDS事業にであったのは宇都宮大学に入学する前であり、外国にルーツのある子供たちの現状や学習支援などの活動報告を読んだときにこのような事業があることに感銘を受けたことを今でも覚えています。

私はペルーにルーツがあります。しかし、大学に入学する前までは自分のルーツをマイナスにとらえていたため、ペルー人である自分を学校生活では出さないようにしていました。みんなと同じ日本人になりたいと思う自分と自分自身のアイデンティティはなんなのかと葛藤していた青年時代を過ごしました。身近で外国にルーツがある友達や親戚が言語や文化の違いで日本の学校生活に適応できず不就学になってしまう状況を目にきました。当時の私は彼らの状況を見て見ぬふりをしており、「日本人のようになろうとしないからだ」と違いがあることが悪いのだと決めつけ、このような状況に向き合うことができませんでした。

宇都宮大学に入学しHANDS事業の活動に参加することを通し、外国にルーツのある子供たちの教育問題への学習支援などのサポートの重要性を学びました。また、活動を通し自分のルーツを生かし他の人をサポートできたので、文化などの違いがあることは悪いことではないのだと理解できるようになりました。

HANDSプロジェクトでの活動は私がアイデンティティを肯定的にとらえることに導いてくれました。この活動の一部を担うことが出来てとても感謝しています。

## ペルー人生徒への学習支援

2015年から2018年の3年間、私は栃木市内にある中学校で、多い時では毎週行き、ペルー人の女の子の学習支援を行いました。

このペルー人の女の子は、日本で生まれましたが、小学生の時に日本とペルーを行き来したため日常会話はある程度はできるもののわからない言葉も多く、日本語が完璧にできるわけではありませんでした。また、学習の面では小学2年生の後期から4年生の前期までペルーにいたため学習が抜けており、学校の勉強に追いついていない状態でした。学校での勉強や宿題がわからないことや友達関係でも言葉の壁で自分の言いたいことがはっきり言えなかった状況が続きました。友達とうまくコミュニケーションをとることができず、なかなか友達ができないことから学校に来ることが楽しくなく欠席することが多くなっていました。

具体的にどのような支援を行っていたかという、彼女が授業でわからなかった教科を復習していました。また、

私はスペイン語を話すことができるため、彼女の母語であるスペイン語で説明しわかるまで教えていました。さらに、学校での友達の悩みを聞いてあげることや、自分も外国人で日本の学校を経験してきたことを踏まえた上でのアドバイスをしたりもしていました。学習のみではなく、彼女の悩みを聴く時間を毎回とりメンタル面や心のサポートも行っていました。

彼女は当初、自分が外国人だから人間関係がうまくいかない、勉強ができないと自分のルーツをマイナスにとらえてしまい自分自身のアイデンティティに自信が持てずになりました。しかし、学習支援を行っていくにつれ少しずつ変わっていききました。私の姿を見て同じペルー人の人が大学に入学することができるということが彼女の励みと希望になり、同じように大学に行きたい、勉強を頑張りたいと思うようになりました。また、彼女が学校を休む回数も減りました。

彼女は学習が抜けている部分の影響もあることからテストの点数が良くなく、学力的に高校進学は厳しい面がありましたが、学習支援での復習や彼女自身の勉強への意欲が高まったこと、努力して勉学に励んだことの甲斐があり、定時制高校に入学することができました。

中学校になじめず学校が嫌い、高校進学もあきらめていた彼女が高校に入学できたとき自分のことかのように嬉しかったことを覚えています。

3年間の学習支援を通し、学習支援の重要性や寄り添ってサポートしていくこと、ロールモデルを示すことが大切だとわかりました。

#### おわりに

日本語がわからないことから学校の勉強についていけなくなる外国にルーツのある子どもたちは、学校に行かなくなり、家に閉じこもってしまう場合があります。最悪の場合、不就学になってしまいます。そのような子供たちは、「自分はできない人間なのだ、外国人だから日本語ができず進学ができないのだ」と思うてしまうことや、将来に希望が持てないことや、夢を持てないことがあります。

自分に外国のルーツがあるから、言葉や文化に違いがあるからできないのだと思うのではなく、このような学習支援を利用することや努力すれば日本語もわかるようになり、学習にもついていき日本社会でもやっていける、さらに自分のルーツはマイナスにとらえるのではなく役に立つことがたくさんある、と少しでも多くの子供たちが思うようになるのが私の願いです。

#### 半年の集中支援

大学院地域創生科学研究科1年 于 稚楓 (ウチフウ)

去年の10月から今年の2月まで、中学3年の中国人生徒A君の日本語勉強を手伝いました。最初にA君と会った時、中学校の会議室で、私は中国語で「私も日本語の勉強をしています。困ったことがあれば教えて下さい」と言いました。A君も「ありがとう、わかりました」と中国語で答えてくれました。

初めての勉強では、私たち二人は授業から離れて自習室で勉強しました。授業中に難しいことがあるかどうかを聞いたところ、中国の数学、英語などの授業内容は日本の同学年のコースよりはるかに難しいとのことでした。日本の中学校3年生の内容は中国の中学1、2年生の時とほぼ同じと言います。最も困難なことは、日本語だらけの国語と社会、そして日本語が分からないために完成させられない問題とのことでした。

A君から話を聞くと、日本に来る前には五十音の勉強だけをしていたということでした。日本に来てからの日本語の勉強については、基本的に日本に居住しているおばあちゃんが教えてくれていました。私は日本語でA君と簡単な会話をしようとしたのですが、彼はほとんど簡単な単語しか答えられず、文にはなりません。私はA君と一緒に彼の教室に入って、支援することもしました。学生に本を読ませて考えさせるコーナーの中で、先生はA君のそばに来て彼が理解できているかどうか、聞いてきました。

授業後、男子生徒たちはA君と遊んだり、追いかけてをしたり、トランプをしたりしていました。ただ、A君は日本語をほとんど話さず、クラスメートとの会話は簡単な英語で行われています。私は、簡単な会話や日本語を知っているのに、どうして日本語で話したくないのですか、と彼に聞いたことがあります。A君は発音が変なので他人に知られて直されることが恐ろしくて嫌だと答えました。これは彼のこの年齢のプライドに関わっていると思いました。

その後、私は国語の教科書の中から、日常生活でよく使われる文法を出来るだけ選んで勉強を行なうようにしました。文章を作る際にも、日常生活における文脈をできるだけ意識しました。そして、日本語の文を聞いた後、聞くだけではなく、その言葉をノートに記録し、スムーズに読まなければならないということを目指しました。日本の同級生や先生と日本語を使って交流することを、彼の目標としました。

秋休みの後、彼は休み中にクラスメートとlineでチャットしていたと教えてくれました。クラスメイトは「荒野行動」と

いうスマホゲームを招待しましたが、A君はこのゲームが上手で、いつもチームを勝利に導いていました。このことが原因でA君は男子の間で人気者になりました。そして、私を喜ばせる変化が起こりました。授業間の休みの時、彼は私に中国語で話すことが少なくなり、もっと多くの時間をクラスメートと一緒に遊ぶことに使いました。

12月中旬、受験が近づいてきました。A君が目標としている学校は公立の全日制高校です。私たちの勉強は面接の練習に多くの時間を使うようになりました。彼は面接の時に、わからないことを聞かれるのではないかと心配している様子です。例えば、「好きな映画を紹介してください」と聞かれると彼は分かるのですが、「最近見た映画の中から、好きなものを選んで紹介してください」と聞かれると、彼はなかなか理解できないのです。そこで私たちは可能性のある問題をすべて書いて、勉強しました。

2月13日A君から希望校に合格したというメッセージが届きました。私はとても嬉しかったです。彼は慣れない環境のなかで、日本語の勉強に対してずっとポジティブな気持ちを持ってきました。私はその彼に少し感動しました。

実はA君と一緒に勉強している間、面白い裏話がたくさんあります。5ヶ月同じ人と一緒に勉強するのは、なかなか難しいことだと思います。この思い出は、きっと私の人生の中で貴重な経験の1つになります。

#### 中学3年進級時に来日した生徒の高校進学を見守って

那須塩原市立三島中学校 教頭 俵藤 秀之

宇都宮大学学生ボランティアとの交流の始まりは、「多言語による進学ガイダンス」開催についての案内からでした。9月2日に田巻先生が本校に説明に訪れた際、本校に在学中の中国籍の二人の生徒への支援についての話をしたときに、学生ボランティアの話をいただきました。早速、その話に飛びつき2名の中国人留学生の支援が実現しました。

二人の留学生は週に1日、宇都宮からわざわざ本校まで出向いてくれました。二人の丁寧なサポートは生徒にとって大変有意義なもので、彼らは毎週留学生の訪問を心待ちにするようになりました。

特に、県立の進学高校を希望していた3年生のU君にとって、留学生ウさんとの出会いはまさに奇跡の出会いでした。中学3年進級時に来日した彼は、まったく初めての日本でした。彼自身も家族のサポートを受けながら一生懸命学習に取り組み、学力も向上していきましたが、不慣れた日本語や進学についての各種手続きについての不安

はぬぐえませんでした。本校でも、学区内にある小学校の日本語指導教室へ通級できるように手配するなどの支援を行ってきましたが、受験期を控え、より効果的な支援を模索していた最中でした。ウさんの支援は彼の日本語指導だけでなく、授業に入ってから学習補助、進路選択への的確なアドバイス、そして、日本での生活に適應するための様々な助言まで非常に素晴らしいものでした。以下は、実際に支援を受けたU君と学級担任のコメントです。

#### ◆U君(三島中卒・県立全日制高校1年)

去年の9月から、同じ中国から来た留学生のウさんが中学校に毎週1日来て、日本語を教えてくださいました。今年2月まで毎週来てくれました。この期間、私たちは、一緒に話をしたり、笑ったりしました。私の日本語のレベルはとても向上しました。彼女のサポートのおかげで、私は希望していた高校に合格することができました。私は、ウさんにサポートしてもらったことに感謝しています。

#### ◆学級担任から

昨年4月に来日し、初めての日本での生活、初めての日本の学校、大きな不安があったと思います。日々の学校生活、また修学旅行や体育祭などの学校行事を通して、新しいクラスメイトと楽しそうに話をする場面は徐々に増えていきました。しかし、日本語を理解するのが難しく、うまくコミュニケーションがとれない様子でした。

そんな中、9月からウさんが毎週1回来てくれたことで、U君の笑顔も増え、授業に対しても積極的になってきたと感じました。日本語を教えてくれただけでなく、母国語で話ができる安心感、授業のサポート、悩み相談など、U君の大きな支えになりました。

知らない国で勉強する外国人中学生にとって、同じ国からの留学生のサポートは大きな支えになりました。大変感謝しています。

さて、二人の留学生は、中国籍の生徒への支援のために積極的に教室に入って授業のサポートをしたり、一緒に給食を食べたりしてくれました。教室に、他国の大学生がいることに対して、初めは戸惑っていた生徒たちも次第に慣れて、知らず知らずのうちに異文化交流を体験し、自分と違う価値観や文化に触れることができたように思います。グローバル化が叫ばれる現在、このことも、本校生徒にとって大変貴重な交流になったと思います。

また、留学生ではありませんが、他にも地元の大学生に数学の授業のサポートに入ってもらいました。夢の実現を